遷景

生き続ける緑の遺構

私たちの提案は、廃線跡全域に対して「ただそこに顕れる環境を守ること」である。
緑に覆われていくことで津波が残した痕跡は次世代へ継承され、過去を想起する場を提供すると共に、未来の生活を守る自然の防波堤としての役割も果たす。
成長する緑の帯は、周辺の人里との対比によって年を重ねるごとに景色として際立ってゆき、陸からも海からも遠景として眺められることで人々の記憶の片隅に刻まれていく。
豊かに成長した植生は海をも豊かにし、漁業を中心とする生活を支える。
植生の自律的な遷移に委ねられ姿を変え続ける遺構は、「震災」を「点」ではなく今もなお続く一連の「線」の出来事として保存し、途切ることなく未来へと続いてゆく。

「一番の　カツオ船が入りて　たちまちに
町に銀鱗の　夏が充ちゆく」

『震災のうた　1800日の心もよう』より抜粋

一、調査

■ 短歌から読み解く、「環境の遷移」と「動き続ける」震災の様子

よく「震災から○○年」と耳にするが、それは私たちが震災を「点」として捉えている証だろう。写真や映像に記録される震災の驚異は、私たちに「点」として伝達され、やがて記憶から遠ざかっていく。
しかし本当は、「震災」は2011年から今もなお続く一連の「線」なのではないか。もしそのような認識ができれば、遠ざかっていく出来事を少し身近に感じられるようになるのではないか。私たちはそう考えて、新聞社に寄せられた5年分の短歌を読み解き、「動き続ける」震災の様子を知った。
650首の短歌の中には共に暮らしを営んできた海や山への愛着や、被災現場に生えた植物の成長過程に慰めや希望を抱く歌が数多く登場する。
それらの歌を読むと、「ただそこに顕れる」環境の遷移が、堤防や嵩上げなどの人の手による復興事業よりも、無理がない速度で人間の心の変化に寄り添い支えているように思えた。

河北新報社編集局『震災のうた　1800日の心もよう』河北新報出版センター　2016

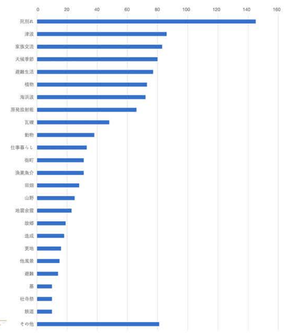
詠まれた種 / ヤマザクラ、ミズキ、ヤマユリ、クワ、ヤマブキ———山地
サクラ、スギ、モクセイ、ツバキ、カキノキ、イネ、タケ、アジサイ、クロッカス、コスモス、フクジュソウ、ヒガンバナ———人里
スズメノカタビラ、イヌノフグリ、ネジバナ、アカザ、フキノトウ、ヨモギ、アワダチソウ、ホウキグサ、タンポポ、ツキミソウ、ノバラ———荒地
マツ、ハマナス———海岸　ミズアオイ、ヨシ———湿地

風　　景 / 海、浜、港、潮の香、潮風、海鳴り、波音、浜人など。
多くの命を奪った海ながら、身近に暮らしとともにある海への愛着を詠む歌が多い。眼差しの先に海を読んだ歌。山の歌の多くは造成に関連したもの。鉄道の歌は流された鉄道跡を歌ったもの。造成によって山が削られ、海への視界を遮る防潮堤が築かれることを嘆く歌。

植　　物 / 津波で失われた自然を詠んだ歌;津波後の自然の再生を詠んだ歌。草花に大地や心の傷を対比させた歌。花に希望や安らぎの気持ちを込めた歌。桜を詠む歌。

漁業・魚介 / マグロ船、サンマ船、カツオ船、魚市場、漁師、魚屋、海苔、若布、牡蠣、鮭、海鞘

天候・季節 / 雪、星、春、青空に心情を重ねる歌

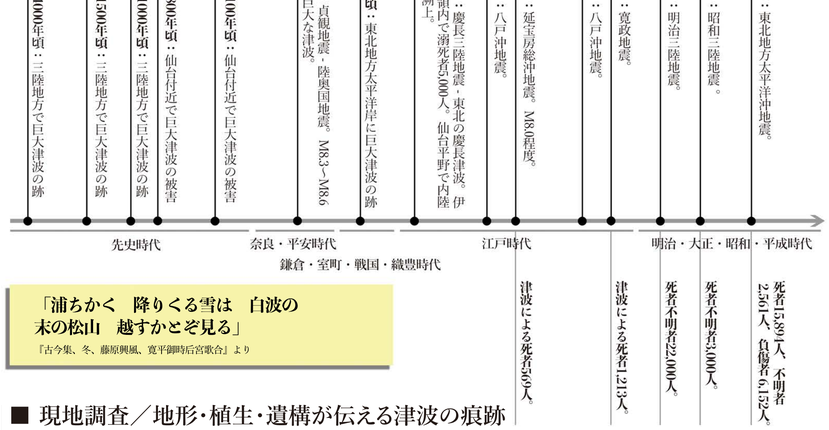


多く詠まれた主題

■ 過去の津波記録

「街は消え　荒野の果てる　海辺まで　泡立ち草の　黄なるさざ波」

『震災のうた　1800日の心もよう』より抜粋



「浦ちかく　降りくる雪は　白波の
末の松山　越すかとぞ見る」

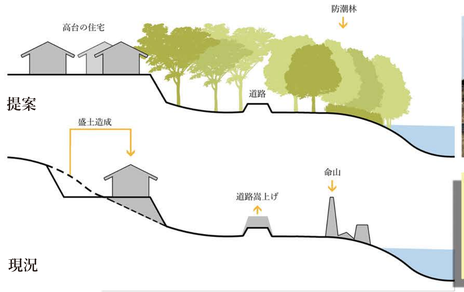
『古今集、冬、藤原興風、寛平御時后宮歌合』より

■ 現地調査／地形・植生・遺構が伝える津波の痕跡

津波によってJR気仙沼線の線路は流され、廃線となった。現在の鉄道跡には、その時の津波による大地の浸食の跡、枯損したマツ、流された住宅の基礎跡が残る。

■ 現地調査／大規模な造成によって遠ざかった自然環境

被災地では山を削った高台移転のための造成や、海への視界を遮る防潮堤の建設、市街地の嵩上げが進み、かつての自然と共にあった風景が失われてしまっている。



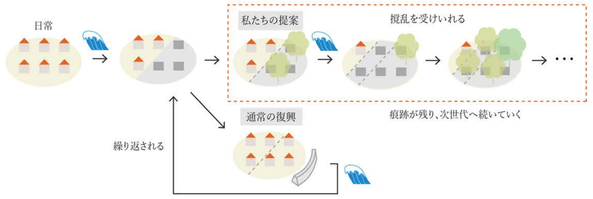
「ようやくに　嵩上げなりたる　道行けば
土地勘薄し　余所者のごと」

『震災のうた　1800日の心もよう』より抜粋

二、コンセプト

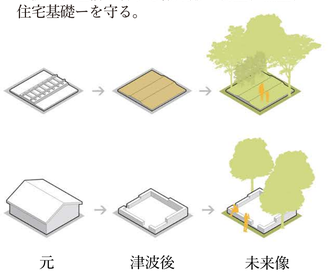
■ 環境の遷移を活かした「成長し続ける」遺構づくり

私たちの提案は、線路全体に対して「ただそこに顕れる環境を守ること」である。倒壊した家や浸食による地形など従来の復興では撤去されてしまうものを、そこへ顕れる植生と共に受け入れていく。津波の痕跡は緑の帯として残り、成長する植物の姿が出来事と共に当時から現在までに流れた時間を現し、当時と今が地続きであることを認識させる。

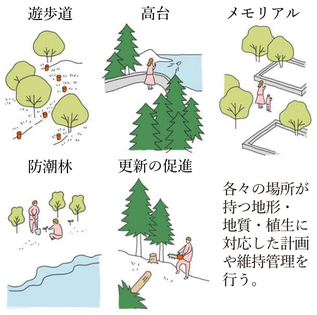


植物を活かした地形保存

成長する地被と樹冠が、地表面の土壌流出を防ぎ、遺構の有する微地形ー切土、盛土、住宅基礎ーを守る。



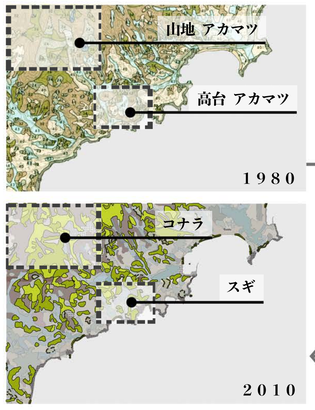
「部分的な」大地の手入れ



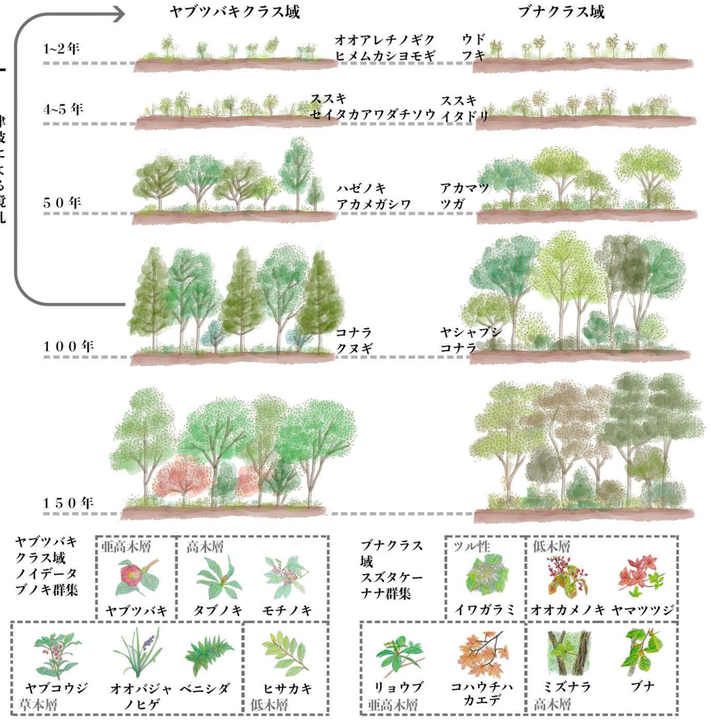
各々の場所が持つ地形・地質・植生に対応した計画や維持管理を行う。

三、手法

■ 植生遷移を活かした計画



1980年においてアカマツ林だった山地が、2010年にはコナラ林へと変化している。これは自然の植生遷移が進んだことを示す。今後さらに、ブナやイヌブナ林に遷移し豊かな森が形成されることが予想される。
一方、対象地の高台斜面では、アカマツ林がスギ林にかわっており、植林が行われたものと考えられる。提案では、海岸斜面においてスギ林を再び潜在植生であるアカマツ林に転換し三陸地方特有の海岸景観をつくることを、また、河畔斜面においてはムクノキ・エノキに転換し明るい樹林にすることを目標とすることができる。



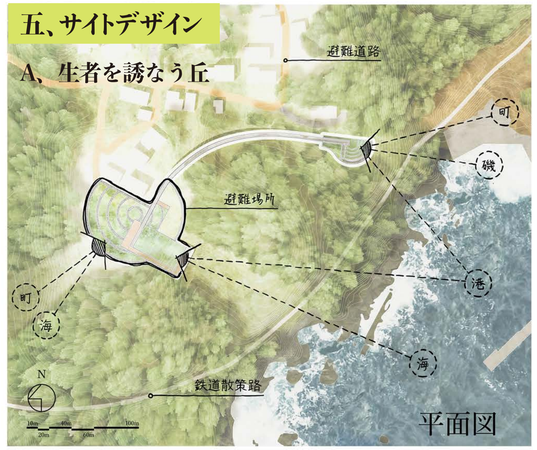
四、マスタープラン

「五年前　夢中で逃げし　登り坂
今日はゆっくり　海見て下る」

『震災のうた　1800日の心もよう』より抜粋

五、サイトデザイン

A、生者を誘なう丘



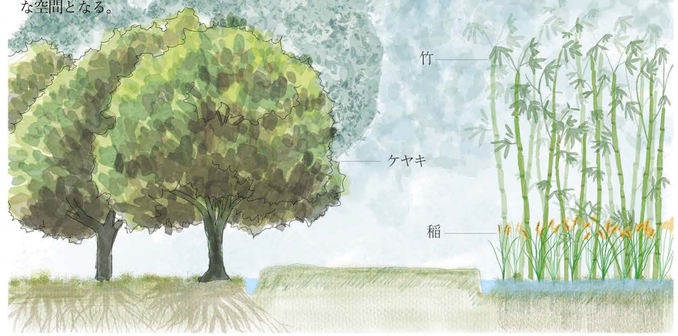
山の木々を部分的に伐採した見晴台からは、鉄道跡や前浜地区の住宅跡と、現在の生活の場である海や街や田畑を同時に臨むことができる。災害時には避難所となり、この場所に訪れた経験は未来へと活かされる。

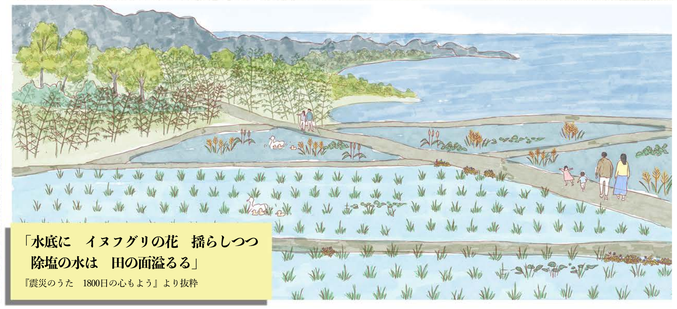
前浜地区に残る10基近くの住宅跡の基礎を、その場に生える植物と共に保全する。敷地の外形が浮かび上がるよう基礎の内側には植物が生えないよう定期的に手入れを行い、その行為が今を生きる人々とかつての震災を結びつける。

B、死者と生きる浜

5、受け入れの田

廃線跡は農道となる。水田と竹林が農村景観をつくる一方、放棄された水田跡は湿地へと移行し、撹乱を受け入れる生物多様性の高い開放的な空間となる。



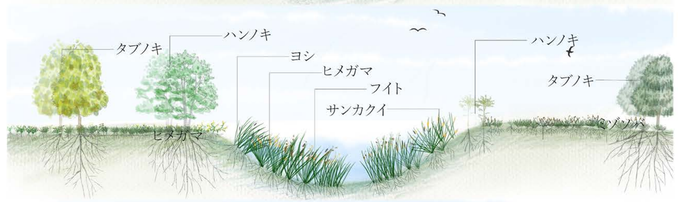


「水底に　イヌフグリの花　揺らしつつ
除塩の水は　田の面溢るる」

『震災のうた　1800日の心もよう』より抜粋

1、ミズアオイの沼

鉄道の切土部や地盤沈下した低地には湿地化した場所が見られる。安定した湿地が維持されると湿性植物が繁り、ハンノキ林へ遷り変わる。津波によって撹乱を受けた湿地では、それまで姿を消していた準絶滅危惧種であるミズアオイも出現した。



「仕分けされし　瓦礫の傍えの　貯水池に
ゆくりなく見つ　水葵の花」

『震災のうた　1800日の心もよう』より抜粋

2、草萌ゆる鉄路

地被が覆い、樹冠が成長することで盛土部は土壌浸食から守られる。遷移途中段階では、乾燥した尾根筋にマツが優先する。遷移最終段階においては、海岸に続く斜面では海岸植生及びタブノキやモチノキなどからなる林が、陸側の谷や氾濫原側の斜面ではムクノキやエノキなどからなる林がゆるやかに交わりながら広がる。

「錆しまま　津波の曲げし　鉄路あり
ひと雨ごとに　草の芽萌ゆる」

『震災のうた　1800日の心もよう』より抜粋

3、マツの崖

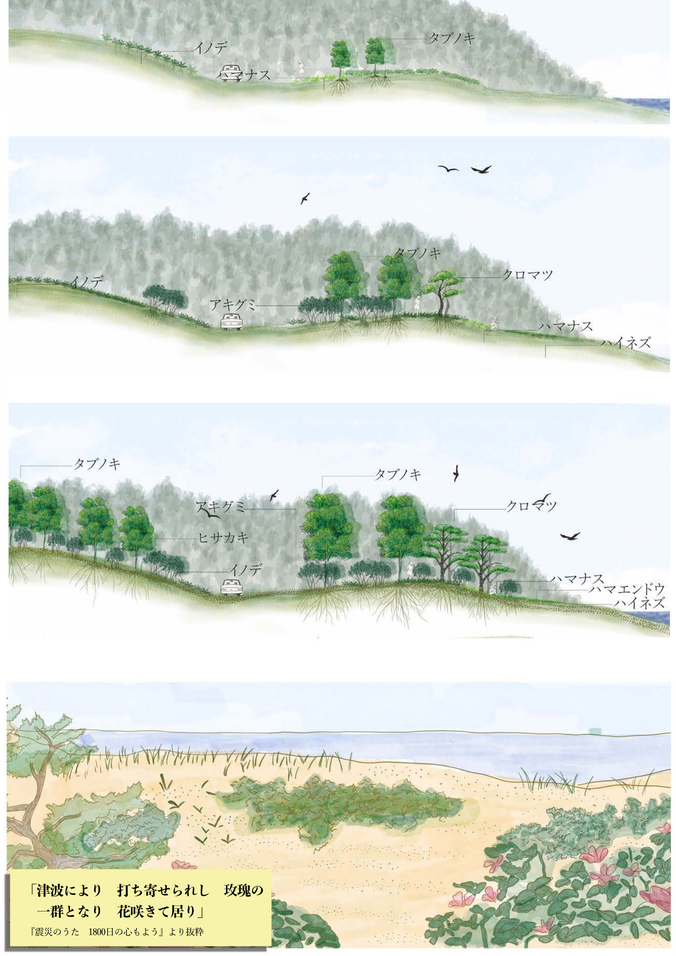
普段から波をかぶる海岸崖には耐潮性の高い草本植物とクロマツ林が根を張る。現況では崖の最上部はスギ植林地であるが、潜在植生であるアカマツやヤマツツジ林に転換することで、東北地方太平洋側に特有の海岸景観をつくることができる。

「指折りて　数うる程の　松の木の
間にのぞく　盛りあがる海」

『震災のうた　1800日の心もよう』より抜粋

4、ハマナスの浜

植林を行い、潜在植生であるタブノキなどの常緑樹とクロマツとの混合林とすることで堅強で回復力のある防潮林を育てる。浜辺にはハイネズやハマナスの広がる海岸風景が生まれる。



「津波により　打ち寄せられし　玫瑰の
一群となり　花咲きて居り」

『震災のうた　1800日の心もよう』より抜粋